

## 『代替医療について思うこと』

ひじり在宅クリニック 院長 岡本 拓也



自分で言うのもなんですが、私はどちらかというと、(医療者の中では)懐が広いというか、器が大きいというか、患者さんやご家族の要望に対して寛容な方なのではないかな…と自分では思っています。少なくとも、それはダメ、と頭ごなしに否定したりする方ではないと思います。患者さんやご家族が何かを希望されてきた場合、その選択肢を実行に移すことが、総合的に考えて、患者さんやご家族に対して利益をもたらせば尚よいですが、何らの利益ももたらさなかつたりむしろ多少の不利益をもたらしたりすることが予想されたとしても、結果的に患者さんやご家族のより多くの満足や納得をもたらすことになるだろうと考えられるのであれば、気持ちよく受け入れるようにしています。

しかし、そんな私でも、断固として否と言わなければならない時もあります。患者さんやご家族と対決しなければならないような場面もないわけではありません。

皆さんは、「代替医療(代替療法)」という言葉聞いたことはありますか? 「代替補完医療」とか、通常の医療と合わせて「統合医療」と言われることもあります。いわゆる「民間療法」と称されるものも、これに含まれます。丸山ワクチンや蓮見ワクチン、アガリクス、フコイダン、鍼灸、アロマテラピー、ホメオパシー、サプリメントなど様々なものがあり玉石混交ですが、「1つの製品/方法で万病に対応できる」「奇跡的/画期的な治療薬/治療方法」「個人の奇跡的な体験談」等の宣伝文句があればまずは疑ってかかった方が賢明です。中には極めて高額な金銭が必要とされるものもあり、高額=効果があるはず、と思ってしまう人の心理に付け込んだような悪質なものもあります。まやかしのデータ・実験等の科学/医学的解説や医学博士・大学教授等の権威をちらつかせているものも疑うべき印です。

訪問診療で関わり始めたその患者さんは、進行癌の終末期状態にあり、余命は週の単位と推測されました。かなりの高齢でもあり、寝たきり全介助で、意識はありますが自らはっきりと意思表示できる状態ではありませんでした。この患者さんのご家族が、特殊な「代替療法」の信奉者でした。いつものように、当初はご家族が施される特殊な療法を私は許容していました。が、その療法によ

て、患者さん本人の皮膚がかなり酷い状態になってきて、患者さんの表情が苦痛に歪むのを見るに至って、さすがの私もその「治療」を中止するように伝えました。同居の娘は、父親思いの娘だけあって、私の提案にすんなり納得してくれたのですが、納得しないツワモノの「おじさん」が現れました。「あんなあ、私らがすることを止めさせるんだったら、治せなかった場合はただじゃすまないからな!よく覚えとけよ!」とすごまれたりもしました。その「おじさん」の啖呵を切る姿に力を得たのか、それまで黙っていた同居の娘の夫も加勢に加わり、「この治療を止めたら治らないだろ!諦めたらダメだろ!」と興奮してまくしたてる始末。しかし、患者さん本人が自らの意思によらない「治療」で苦しめられている現状を前にしては、私もおめおめと引き下がるわけにはいきませんので、ここは戦い抜くしかないと思いをくくり、普段は寛容な医療者である私も、一歩も引き下がらず、「おじさん」たちに対峙いたしました。

結果、患者さんは終末期のがん患者さんの予想通りの経過をたどって間もなく看取ることにはなったのですが、少なくとも、その対決以降は、患者さんには病氣以外の余計な苦しみを味わわせないで済みました。病氣自体は治せないものの、病氣による苦しみを和らげてさしあげることはできたと思います。看取りの場には、その「おじさん」も同席していらっしやいました。どういう対応をしてこられるかなと思っていたら、なんと微笑みさえ浮かべ、私に対してお礼を言ってこられました。私も、別にその「おじさん」が憎いわけではありませんので、「まあ、色々ありましたけど、皆さん、良かれと思って、一番いいことを〇〇さんにしてあげたいと願うてのことですすね。結果的に〇〇さんが希望されたご自宅で安らかに最期をお迎えになられたのですから、良かったですね」と応じたのでした。

代替医療を否定する気持ちは微塵もありませんし、効いているのでは、と思うケースもあります。しかし、本人が望んでもいない「治療」で患者さんを苦しめるような愚かな所業を見過すわけにはいきません。藁にもすがりたい気持ちは理解できますが、「代替医療」に関しては慎重かつ賢明な対応を期待致します。